慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	トーマス・マンの『魔の山』におけるペーペルコルンについて
Sub Title	Über Peeperkorn in Thomas Manns „Zauberberg“
Author	坂口, 尚史(Sakaguchi, Naofumi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 No.41 (2005. 9) ,p.31- 55
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20050930-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トーマス・マンの「魔の山」における ペーペルコルンについて

坂　口　尚　史

はじめに

トーマス・マンが 1955 年 8 月 12 日に死去してちょうど 50 年目の夏をむかえた。8 月 7 日の日曜日には，Thomas-Mann-Preis がワルター・ケンポヴスキー氏におくられることになり，リューベックのドイツ・トーマス・マン協会から，フンデシュトラーセにある市立図書館の歴史的なホールで行われる授賞式の案内がきたところである。ローベルト・シューマン作曲のオーボエとピアノのためのロマンツェ作品 94 が授賞式に際して演奏されるとのことであり，ロマン派の音楽を愛したマンを偲ぶ演奏になることであろう。

これに先立つこと約 3 年前から，フランクフルトの S. フィッシャー書店がトーマス・マン大全集，Große kommentierte Frankfurter Ausgabe, Werke-Briefe-Tagebücher の刊行を開始し, 予定では 17 年ほどで全 38 巻（作品の注釈本は別冊）を完成させることになっている。2003 年秋には Band 5. 1 Der Zauberberg（Textband）と Band 5. 2 Kommentarband が出版された。

日本でも没後 50 年を記念して，学会誌が 2004 年に二度目の詳細な Bibliographie を編集している（Band 3, Heft 4）。また没後 40 年の 1995 年にドイツで出版された Klaus Harpprecht の大著 Thomas Mann Eine Biographie が，岡田浩平氏の翻訳により三分冊にして刊行されることになり，その最初の巻『トーマス・マン物語 I　少年時代からノーベル文学賞まで』が 3 月に出版された。原書は本文だけで 2000 ページを超える大きな本であり，

初巻は第 49 章までの約三分の一を翻訳している。訳者あとがきによると，この本はペーター・ド・メンデスゾーンの未完に終わった伝記の遺志を継いでいるという。日記の出版が完了したのを受けて，書簡などを基本資料とし，「人間」トーマス・マンを描こうとしている労作である。その中の第 39 章は「魔の山」と題されており，ペーペルコルンのモデルとされたゲールハルト・ハウプトマンとの関係について言及しているので，本論にとっても大いに参考にさせていただいた。

第6章第7節「雪」について

長編小説『魔の山』は 1924 年 9 月に完成した。二巻本として刊行され，前半に第 5 章までを，後半に第 6 章と第 7 章が収録されている。いずれも大きい章であり，第 7 章で終わるのは，主人公ハンス・カストルプが，スイスのダヴォス村にあった国際サナトリウム「ベルクホーフ」に滞在した 7 年間に対応している。小論においては最後の第 7 章に登場するオランダ人ピーター・ペーペルコルン（Pieter Peeperkorn）について，この人物が登場する意味を考えてみたい。第 7 章の第 2 節 Mynheer Peeperkorn から始まり，第 5 節でこの人物が死去するまでである。タイトルはメネール・ペーペルコルンと読み，「ペーペルコルン氏」と訳される（岩波文庫版，関泰祐，望月一恵訳 [1]）。

『魔の山』のクライマックスはしかしながら，第 6 章第 7 節「雪」にあると考えられている。このため，「雪」の章の内容について簡単にふれたあと，クライマックスの後になぜさらに，大きな第 7 章があり，それまでとは全く異なったタイプの登場人物が現れるのかについて述べなければならない。

故郷ハンブルクから，従兄弟のヨアヒムを見舞いにやってきた造船技師ハンス・カストルプは，これまでのトーマス・マンの作品にはよくみられた芸術家気質をもった人物ではない。この作品は，中篇『ヴェニスに死す』（1912）の悲劇に対するサテュロス劇として [2]，構想された。アッシェン

バッハの悲劇を，「市民としての義務と恐ろしい冒険との間の風変わりなたたかい」として，変奏させていくという，そのようなプランだったようである[3]。しかしそれが，第一次世界大戦をはさんで大きく膨れ上がっていった。低地から高地にやってきて自らも発病し，サナトリウムにとどまることになったカストルプは，さまざまな患者たち，院長ベーレンス，代診クロコフスキーなどから影響を受ける。北ドイツ市民の，ハンザ同盟都市の文化を大切なものと考えているこの主人公は，受動的であり，はっきりと決断しない性格の青年である。この主人公を引き込もうとする流れはさまざまであり，作者はそれぞれの立場を Ironie をもって眺めているといえよう。中でも前半から登場し最後まで消えさることのないイタリアの人文主義者セテムブリーニ，カストルプにエロスを感じさせるロシア夫人の

1）Mynheer Peeperkorn の読み方について，小学館版『大独和辞典』第 2 版 1990 にしたがってメネール・ペーペルコルンとしておく。新潮社版『トーマス・マン全集 III』（1972）や新潮世界文学 34『トーマス・マン II』および新潮文庫『魔の山』（下）における高橋義孝訳では「メインヘール・ペーペルコルン」となっていた。新潮世界文学 34『トーマス・マン II』の解説で訳者は，「なお訳文中のメインヘール・ペーペルコルンという人名表記はメネール・ペーペルコルンと訂正する（同書 789 頁）」と述べている。

　Mynheer はオランダ語で，Mijinheer とも書き，ドイツ語で Mein Herr を意味する。目上の男子に対するオランダ語の呼びかけであり，「だんなさま」のことである。

　この名前の由来について，新トーマス・マン全集の注釈は，トーマス・マンがフォンターネの小説「シュテッヒリン」に登場する Herr van den Peerenbom というオランダ人名を変えて用いたとしている。また Oscar Seidlin の説として，Peeper はジャヴァ出身の植民地オランダ人を暗示するものであり，-korn は Korn であって，「パンとぶどう酒」の二重の意味をもたせているという説を紹介している。注 22），23）参照。

2）Thomas Mann: Gesammelte Werke, Band XI, 1974 (1960) Frankfurt am Main, S. 125 (Lebensabriss 1930)

3）a.a.O, S.125

シャーシャ，後半の第 6 章から登場するイエズス会士ナフタは重要な人物である。

第 6 章も終わりに近い，「雪」の節で作者は，20 世紀の混乱を克服する新しい人間主義（Humanität）の予感をカストルプに体験させている。雪の中で遭難しそうになりつつも彼がみた夢は，思想的内容をもった夢であった。

夢の中で彼はバルコニーに立っており，その下に公園がある。針葉樹（Nadelbäume）ではなく闊葉樹（Laubbäume）の緑が美しい。ニレ，プラタナス，ぶな，かえで，白樺がみえた。湿った，木々の香にみちた微風がきており，北ドイツにはない南国風の景色である。虹がかかり，「フルートとヴァイオリンが入ったハープの音色[4)]」がきこえたように思われた。そのうちに海が現れてきた。地中海沿岸地方へ旅行したことのないカストルプではあったが，眼前にひろがっている「青い海の幸福」（das blaue Sonnenglück）と海岸にいる海の子たちに「再会」したような気持にとらわれていた。

ところが，これらの健康で賢い人たちの背後に，暗い神殿の門柱があった。背後を見るようにうながしたのは「一人の美しい少年」であり，カ

4） Thomas Mann: Der Zauberberg S.739 以後原書の頁は（ ）に示す。2002 年に Frankfurt am Main の S. Fischer Verlag から刊行された Thomas Mann: Große kommmentierte Frankfurter Ausgabe, Band 5. 1, Der Zauberberg, Herausgegeben und textkritisch durchgesehen von Michael Neumann（この全集を「新全集」と呼ぶことにする。）で頁数が示される。S. Fischer Verlag からは多くの「魔の山」の版が出ており、前頁注 2）の全集版 III（1974）では 677 頁。筆者が最初に読んだ Stockholm 全集版（1950）では 694 頁。この版はウィーンで印刷された珍しい版であり、版権は 1939 Bermann-Fischer Verlag, A. B., Stockholm である。トーマス・マンはこの版が出た当時アメリカに住んでいた。マンの死後 5 年後に刊行された Gesammelte Werke in 12 Bänden（1960）は長い間研究書で引用されてきた版であり、1974 年版が手元にある。

ストルプが坐っている下に立ちどまって彼の頭ごしに背後を眺めたのである。その少年の表情からは，海辺の子らの微笑が消えて去っていた。「彼の表情には，まるで石のような，無表情の，究められないような真剣さ，死のようにうちとけない表情が[5]」現れていた。トーマス・マンの読者にはこれが人を冥界に誘う神ヘルメスであることがわかる。カストルプは神殿の中へ入り，そこで年老いた醜い女が二人，幼児を引き裂いて食べている恐ろしい光景を目にする。

すべては夢であったが，闊葉樹の公園の気持ちよい湿気も，その後の死の恐怖もカストルプには前もってわかっていたかのように思われた。彼は魔の山での体験をふり返って，高地のサナトリウムでのできごとがこのような夢をみさせたのだと気づく。多くの患者たちに接し，彼らの死に接することによって彼は病気と死に親しんできた。低地へ帰れなくしてしまったのが病気のクラウディア・ショーシャ夫人であり，彼女と交わりによって人間の肉と血を認識した。しかし，病気と死に寄せる興味はすべて生に寄せる興味の現われである。低地から高いところへやってきて，息が切れそうになりつつも，今神殿の円柱の下にいる。人間の礼儀正しい聡明な共同生活を夢にみて，次にその背後の神殿の中で恐ろしい血の饗宴をみた。海辺の子らの礼儀正しさと神殿の中の血の饗宴というコントラストは，ニーチェの『悲劇の誕生』におけるアポロ的なものとディオニソス的なものの対立を想起させる。

カストルプは，「いつも理性の小ホルンを吹くばかりの[6]」セテムブリーニにも，「神と悪魔，善と悪のごったまぜにすぎない[7]」ナフタの宗教

5）Der Zauberberg, S. 743

6）Der Zauberberg, S. 747 「理性の小ホルン」は一語で、Vernunfthörnchen と書かれている。

7）Der Zauberberg, S. 747 「ごったまぜ」はイタリア語で guazza-buglio と書かれている。

にも，どちらにも味方しないことを誓う。そして，「あの貴族性の問題！　あの高貴性の問題！　死か生か，病気か健康か，精神か自然か，これらは互に矛盾し合うものだろうか？[8]」という人文主義的な問題，この小説のテーマである大きな問題について一応の解決が示される。それは「人間についての夢の詩」（ein Traumgedicht von Menschen[9]）として表現され[10]，さらにハンス・カストルプの認識，「人間は善意と愛のために，その思考に対する支配権を死に譲りわたしてはならない」という認識に達した[11]。

ペーペルコルンの登場

第 6 章の「雪」の部分を頂点と考えるならば，『魔の山』全体は第 6 章で終わることもできたであろう。しかし，完成作においては，第 6 章の最後に報告された，従兄弟ヨアヒム･ツィームセンの死では終わらなかった。

さらに原書で 270 ページにも及ぶ第 7 章が書かれた。この小説に長年取り組んでこられた，新潮社版トーマス・マン全集第 3 巻『魔の山[12]』の訳者高橋義孝教授は，1970 年度慶應義塾大学大学院文学研究科の演習を担当されたとき，テーマはエルンスト・フィッシャーの『芸術と共存』であったが，『魔の山』の話をされたことがある。この小説は，第 6 章のあともつづいて，本来終わらない性質の小説であるが，作者はラテン語で FINIS OPERIS と最後にしるすことによって，強引に終わらせてしまったのであると言われた。マンは，1924 年 9 月 28 日，ミュンヘンからオラン

8） a.a.O, S. 747

9） a.a.O, S. 748

10）a.a.O, S. 748–748

11）原文は、古いストックホルム全集版では活字を離した gesperrt で印刷されていたが、「新全集」ではイタリックで印刷されている。Der Mensch soll um der Güte und Liebe willen dem Tode keine Herrschaft einräumen über seine Gedanken. この一文以外にイタリックで印刷された文は『魔の山』にはない。

12）1972 年 3 月刊

ダのフランス・メネセンに宛てて，「昨日私の大きな小説の下に Finis としるした」[13] と述べている。小説は第 7 章でついに終わった。その第 7 章の半分近くを占めるペーペルコルンが生きている 120 頁は，まことに興味深く，読者に消し難い印象を残すのである。

ペーペルコルンは，第 7 章の二つ目の節 Mynheer Peeperkorn ではじめて読者に紹介される。『魔の山』のそれ以前の登場人物には全く見られなかったタイプの人物であり，ハンス･カストルプにとって経験の拡大であり，新たな敬意を感じさせることになった。彼はディオニュソス的な，陶酔的な自然への帰依者であった。この年配のオランダ人は，サナトリウムの看板である「国際」の名にいつわりのない客として，ショーシャ夫人といっしょにやってきた。カストルプは第 5 章の終わりでショーシャ夫人と関係をもち，彼女の恋人であったので，まさに恋仇のはずである。インドネシアのジャヴァでコーヒー園を経営している植民地オランダ人であり，大きくて堂々とした外貌の持主である。人間としてのスケールが大きく，思想は感じさせないが，生命力と感情の力を感じさせる点でベルクホーフの患者たちに注目された。

ショーシャ夫人がそれまでカストルプをサナトリウムにとどめておいた存在であったが，ディオニュソス的な生命力の代表であるペーペルコルンを彼女の横においてみるとき，彼はショーシャ夫人の対極にある存在である[14]。ペーペルコルンの偉大さにふれたカストルプは，ショーシャ夫人を思いこがれていたヴェーザルという患者との争いを忘れる。オランダ人にひきつけられたカストルプは，ショーシャ夫人の魔力から解放さ

---

13) Thomas Mann Selbstkommentare: Der Zauberberg, Herausgegeben von Hans Wysling, 1995 Frankfurt am Main, S. 54『魔の山』についてトーマス・マンが述べた文を書簡、エッセイなどから年代順にまとねている。全 179 頁。

14) ギリシャ神話の Dionysos は異なる性格をもつ。第 6 章の暗い神殿の場面では死の世界、冥界を示していたが、第 7 章では酒神、豊穣の神としてあらわれている。ローマ神話の Bucchus にあたる。

れ，彼女との関係が切れるとともに，「魔の山」から離れる可能性が生れたのである。

冬から春にかけてペーペルコルンは滞在したが，その間の大きなできごとは，セテムブリーニやナフタも含めて他の患者たちとともにフリューエラ谷と滝を見にでかけたピクニックであった。その前に，恋仇でありながら，なぜカストルプがこの人物にひきつけられたのかという理由をみておきたい[15)]。「ペーペルコルン氏（つづき）」の最初の部分において，作者はその事情を巧みに説明してくれている。

> 「私たちは，あの曖昧な性格のペーペルコルンのような人物とつきあうかわりに，ナフタ氏やセテムブリーニ氏のような人たちを交際相手に選んだのは偶然ではない。それは認めてほしいと思う。そうすると，前二者との比較ということになる。多くの観点から，特に人間的な大きさの点で（im Punkte des Formats[16)]）」あとから登場したこの人物が優位にたつ結果となるにちがいない。ハンス・カストルプもバルコニーに寝てこの比較を検討して思った。彼の哀れな魂をまんなかにしている二人のしゃべりすぎる教育家たちは，ピーター・ペーペルコルンと比較するとまさに小人のようだ，と。」（868–869）

15）第 7 章の第 2 節から第 5 節までが考察の対象となる。原書のタイトルと頁数は以下のとおりである。
第 2 節 Mynheer Peeperkorn S. 826–839
第 3 節 Vingt et un（トゥエンティ・ワン遊び）S. 839–867
第 4 節 Mynheer Peeperkorn (Des Weiteren)
メネール・ペーペルコルン（つづき）S. 868–928
第 5 節 Mynheer Peeperkorn (Schluß)
メネール・ペーペルコルン（終わり）S. 928–947
引用文または引用語句の後に、頁数を（　）で示す。

最初の場面においても，彼のしぐさや態度について，説明がある。「（自分の道具で沸かせて特別濃くした）コーヒーを，飲み終わると，彼はこんなふるまいをした。彼は手をあげながら人々の会話を中止させて静まらせたが，そのようすはまるで，音をだしている楽器の騒音を沈黙させて自分のオーケストラを整然とまとめ演奏開始へともっていく指揮者のようだった。炎のような白髪にかこまれた彼の大きい頭，色の薄い眼，深い額のしわ，長い顎ひげ，口ひげがなくて裂けたような口など，すべてが彼のしぐさにふさわしく合っていた。」（831–832）

外貌もさることながら，彼の言葉は，不思議な言葉であり，ぷっつりと途切れたり，最後まで言われなかったりする。ハンス・ヴィスリングは，Seine Sprache ist Un-sprache. と述べている[17]。彼の言葉は美しく流れない。彼は言葉によって偉大なのではなく，そのヴァイタリティによって偉大なのである。その不思議な言葉は原文で示す必要がある。

> «Meine Herrschaften. — Gut. Alles gut. Er-ledigt. Wollen Sie jedoch ins Auge Fassen und nicht — keinen Augenblick — außer acht lassen, daß — Doch über diesen Punkt nichts weiter. ...»
>
> （訳）みなさん。——よろしい。万事よろしい。片が一つつきました。し

16）das Fornat という語はイタリック体で印刷されている。トーマス・マンはアメリカ時代の講演「私の時代」（Maine Zeit 1950）の中でトルストイを語り、「なるほどトルストイは自然主義の作家だったかもしれません——しかし彼は何よりもまず偉大でした。巨人のごとく偉大 (riesengroß) でした。そして 19 世紀の品格 (Format) をもっていました。」と述べているが、vom Format des neunzehnten Jahrhunderts という句に、トルストイの人間としての偉大さが表現されている。

17）Hans Wysling: Der Zauberberg, In: Thomas – Mann – Handguch, herausgegeben von Helmut Koopmann, 1990 Stuttgart, S. 416

かし注意して下さい――ひとときも――ぼんやりしていてはならない，いやこの点についてはもういいでしょう。……（832）

言葉はよどみ，つかえて，完成しない。しかし表情は意味ありげで，ものものしかったので，聴いている人は何か重大なことをきかされたような気がするのである。「ペーペルコルン氏（つづき）」の節に，セテムブリーニとナフタの論争を沈黙させてしまう，ペーペルコルンの神秘的な力についての描写がある。原文の表現は名詞の羅列であり，「誰が」という説明がない。翻訳をする場合，言葉を補って説明する必要がある。トーマス・マンの原文は以下のようになっている。

Stärkere Spannungen! Verneinung hie und Kunst des Nichts—hie ewiges Ja und liebende Neigung des Geistes zum Leben! Wo blieben Nerv, Blitz und Strom, wenn man auf Mynheer blickte,—was unvermeidlich und kraft geheimer Anziehung geschah? Kurzum, sie blieben aus, ...

（訳）（ナフタとセテムブリーニの論争は）さらに白熱してきた！（ナフタが）否定と虚無の礼讃をすれば，――（セテムブリーニは）永遠の肯定と，生に対する精神の愛を主張する！ しかし，メネールの方をみると，――ひそかなる引力にひかれて見ずにはおれなかったのだが――（論争の）迫力，花火，電流はどこに残っていたか？ 要するに，論争は消え去ってしまったのだ。……（893）

ハンス・カストルプにとって，これは信じられないようなこと，「神秘」（ein Mysterium）であった。「彼は自分のアフォリズム集の中に，神秘はごく簡単な言葉で表現できるか――あるいは表現できないことであるとメモしておこうと思った。」（893）

ハンス・カストルプは，この Mysterium を強く感じることによって，この人物がクラウディア・ショーシャの旅の伴侶として，つまり彼にとっ

て大きな邪魔者としてあらわれたことを忘れ,「これは別問題である」(817)と感じた。しかし，事情を知るベルクホークの患者たちは，彼のこのような態度に納得せず，彼がペーペルコルンを憎み，避け,「頓珍漢の飲んだくれ」などとやっつけた方がずっとよかったと思っていたのである。

ペーペルコルンは，カストルプにとって，ショーシャ夫人への愛を忘れさせ，人類の進歩を唱えるセテムブリーニでもなければ，神の国と邪悪な救済を臨むナフタでもない，両者の対立を解消させる存在となる。カストルプは両者から距離をおいて，軽視していこうとしている。この距離をはっきりとさせるためにペーペルコルンの存在が役立っている。西ヨーロッパ的な民主主義でもなければ，東方のユダヤ人の，共産主義的な考えにも支配されることがなくなった。こうしたことが，ペーペルコルン登場の意味なのである。

新たなエロスのあり方

ハンス・カストルプは，新たなエロスを感じていた。ハンス・ヴュスリングはそれを「偉大さのまねび[18]」と表現している。「トゥエンティ・ワン遊び」の節において，酒神ディオニュソス（バッカス）としてペーペルコルンが描かれている。また最初の「メネール・ペーペルコルン」の節から，彼が酒と深い関係をもっていることが紹介される。そのあたりからこの人物の偉大さを検証するとともにそれが imitatio である点にもふれてみよう。

冒頭の紹介のところから，彼が Pieter Peeperkorn と名のり，«jetzt labt Pieter Peeperkorn sich mit einem Schnaps » というのがお決まりであったことがあきらかになる。sich mit einem Schnaps laben とは，ブランデーを飲んで元気をつける，を意味する。

ハンス・カストルプがペーペルコルンからうけた第一印象には，まだ偉大さはなく，風変わりな男のイメージがあった。彼は院長のベーレンスに

18）die imitatio des Großen. Hans Wysling: Der Zauberberg, S. 416

Thomas Mann: The Magic Mountain, volume two, translated from the German by H. T. Lowe-Porter に収録されていた Felix Hoffmann の挿画。224 頁。
1962 The George Macy Companies, Inc.

むかって，「たくましくてしかも貧相なという印象を受ける」と語っている。Robusut und spärlich, das ist der Eindruck, den man von ihm gewinnt.（829）本来ならば robust であって spärlich であることはない，それが同居しているところが奇妙（kurios）なのである。彼がオランダ人らしく口蓋にかかる声でしゃべっているときは「たくましい」のであるが，あご髯はまばらで，長いが薄い。眼は小さく，瞳の色が薄い。その眼を大きく見開こうとするが，眼は大きくならないで，そのためにかえって額のしわが深くなるのである。

英訳本に収録された，フェーリクス・ホフマンの挿絵を見ていただきたい[19]。トーマス・マンから信頼されていたヘレーネ・T・ロウ－ポータ女史の訳になる二巻本（1962 New York）の Volune two の挿画である。

彼は貧相な面をもつにもかかわらず，食堂でしゃべり出すと，「彼の白髪に囲まれた顔には王者の風格があった。」（833）「王者のような」（königlich）という表現はたびたびくり返されて用いられる。また persönlich gewichtig という表現もあり，人間として大きいという印象を与える。そして，彼の偉大さが最も発揮されるのは，彼がアルコールを飲んでいるときである。「トゥエンティ・ワン遊び」の名場面を追ってみよう。しばらくぶりに，カストルプがショーシャ夫人と話をしているとき，彼らの会話はペーペルコルンの登場によって中断される。夫人は礼儀正しいヨーロッパの作法で,「以前からの知り合い」と言ってカストルプを紹介した。カストルプは大いに気に入られた。他の人々もまじえて, カルタをしたり, 食事をしながらワインを飲んだりすることになる。カストルプは間近に人物に接することになった。ペーペルコルンは語りかける。特異な語り方である。

19）Thomas Mann: The Magic Mountain tranlated by H. T. Lowe-Porter, illustrated with wood engravings by Felix Hoffmann, 1962 New York 224 p.

Junger Mann, — das Einfache! Das Heilige! Gut, Sie verstehen mich. Eine Flasche Wein, ein dampfendes Eiergericht, ein lauterer Korn, — erfüllen und genießen wir das erst einmal, erschöphen wir es, tun wir ihm wahrhaft Genüge, bevor wir — Absolut, mein Herr. Erledigt. ...

（訳）お若い方——素朴なもの！ 神聖なもの！ 結構です，あなたは私の言うことがおわかりだ。一本のワイン，湯気がたっている卵料理，純粋な穀物の火酒（原文の Korn は Kornbranntwein のことである），こうしたもので我々の腹をみたし，味わいましょう。充分に味わいましょう。我々が行なう前に，欲求を満足させましょう。——絶対です，あなた，片がつきました。……（852）

ここでは，食べたり飲んだりする行為が神聖化されているように思われる。人間は自然の恵みを充分に享受しなければならない，とペーペルコルンは語りかけ，それに対しコカイン，ハシシュ，モルヒネといった麻薬を愛する男や女は，自然の恩恵に浴していないと主張する。カストルプは共感して，「健康で素朴な人生の賜物」（854）を味わうことが，いかに大切であるかを語って認められた。喫煙も自然に反する行為だとの指摘に恐れ入りながら。これは豊穣の神の思想である。そして，アルコールがまわってきたとき，ペーペルコルンのバッカス（ディオニュソス）的な面が最高にあらわれるのである。

ハンス・カストルプは突然，ペーペルコルンがそうとうに酔っていることに気づかざるを得なかった。けれども彼が酔っているようすは卑しく恥ずかしい感じではなく，また品位のないものでもなく，彼の人格の王侯のような風格と結びついた，堂々とした畏敬の気持ちをいだかせるような外観をみせていた。バッカス自身も，とハンス・カストルプは考えた，ひどく酔っぱらって彼の熱狂的な同伴者にもたれかかるが，そのことで神性が犠牲になることはない。……（854–855）

ペーペルコルンのこの姿は，カストルプを最も感動させた姿なのであるが，熱帯の熱病であるマラリア熱が彼の限界を示している。彼の病気のことは院長が最初に語っていた。マラリア熱はトゥエンティ・ワン遊びのあとひどくなり，カストルプがペーペルコルンを見舞う場面があるが，そこでは解熱剤キニーネの話がもっぱら中心となる。キニーネの薬物である面と毒物である面を熱心に語るペーペルコルンからは神性は感じられない。（872–875）

神話的な関心をもってみると，イエス・キリストのイメージもあることがわかる。ハンス・ヴュスリングは，ペーペルコルンは，「ディオニュソスとキリストの混合である」と述べている[20]。到着したばかりのペーペルコルンは，給仕女のエメレンティアに声をかけ，パンの話をする。原文では次のようになっている。

> Brot, Renzchen, aber nicht gebackenes Brot, — wir haben hier davon die Fülle, in allerlei Gestalt. Sondern gebranntes, mein Engel. Gottesbrot, klares Brot, kleine Koseform, und zwar der Labung wegen.
>
> （訳）パンですよ，レンツヒェン。だが焼いたパンじゃない。それだったらここにいろんな形をしたのがたくさんある。醸造したパンです。天使さん。かわいい愛称形でいうと，神のパン，透明なパンです。しかも元気づけるためのね（834[21]）

ここに言葉の遊びがあるという。ミヒャエル・ノイマンによる大全集Kommentar本はこのことを教えてくれているが[22]，外国人研究者にとってはわかりにくい事柄であり，これまで読み過ごしてきたといえよう。Brot

---

20）Hans Wysling: Der Zauberberg, S. 417

21）レンツヒェンと天使さんはエレメンティアをさす。

は Korn でもあり，Korn は Kornbranntwein であるから，ヘルダーリンの有名な頌詩「パンとぶどう酒」へのほのめかしがある。それはキリストとディオニュソスを一緒にして「受難のキリスト」（Schmerzensmann）と「バッカス」との間の以下につづく変換を予知している。ペーペルコルンはこのセリフの後で，Genever という酒を給仕の女性に注文しているが，これは「オランダとベルギーでとくによく醸造されるジンの一種で，大麦の麦芽，ライムギと小麦のひき割りを発酵させて[23]」つくられる。つまり，Genever はパンと共通の原料をもつ酒なのである。Korndestillat も，穀物を発酵させてつくった酒の意味であり，klares Brot をめぐる言葉遊びの Variante である[24]。このような Wortspiele の内容について具体的に知ることができるのは新全集の長所である。

ペーペルコルンが，サナトリウムの人々に聖書の一節を紹介する場面では，マタイ伝とマルコ伝の文が引用される。ペーペルコルンは眠りを賛美した後でゲッセマネを思い出せという。イエスがゲッセマネで祈っている間弟子たちが寝ていた。「弟子たちのところへ戻ってご覧になると，彼らは眠っていたのでペテロに言われた。「あなたがたはこのように，わずかな一時もわたし共に目を覚ましていられなかったのか」」（マタイ伝 26 章 40 節[25]）（860–861）きいている患者たちは感動し，「ペーペルコルンは頭を斜めにかしげていた。」（861）これは言うまでもなく十字架上のイエス・キリストの姿である。ノイマンの注釈は，さらにディオニュソスも絵画に

22）Thomas Mann: Große kommentierte Frankfurter Ausgabe, Bans 5.2, 2002 Frankfurt am Main, Der Zauberberg Kommentar von Michael Neumann, S. 353, Oskar Seidlin の研究書（1972）による説をを紹介している。

23）834 頁 15 行目の Genever に関してつけられた語注の一部で、Brockhaus' Konversations Lexikon Bd. VII, S. 778a からの引用である。

24）834 頁 27 行目の Korndestillat の語注。

25）『聖書』、新共同訳 1987 日本聖書協会による。

おいて，頭を斜めにかしげる同じ姿勢をしていることを紹介している。

ディオニュソスでもあり，キリストでもあるイメージは，もともとフリードリヒ・ニーチェの晩年の著作に由来するのであり，ニーチェは彼の最後の書簡に何回か「ディオニュソス」,「十字架にかかった者」と署名した。この両者の合体をトーマス･マンはハウプトマン像にも適用している。1952 年 11 月 9 日に「ゲルハルト・ハウプトマン」についてフランクフルトで講演し,「彼より 13 歳年少であり，初期の彼は知らない」トーマス・マンは，ハウプトマンの作品におけるギリシャへの傾倒とキリスト教的な面について語って次のように述べた。

> アテネ，ギリシャ，明かるい美への愛好，肉体的なもの，自由な感性，女性の美しさへの憧れは，彼の後期の詩作に次第につよくあらわれてくるのでありますが,「情熱的」であり，情熱から生まれたものです。彼の官能（Erotik）は情熱と美への熱狂によって生きています。一方には，キリスト教的なやさしい，萎黄病の，透明な少女たち，ハンネレ，オッテゲーベ,『冬のバラード』のエルザリールのような人物たちがおり，また一方には素朴で自然なエーファの姿があります。『ゾアナの異教徒』のアーガタのように女神に似た姿です。……「彼女は世界の深みから上昇し，驚く人々のそばを通り，次第に永遠の中へ登っていく。天国と地獄が彼女の容赦のない手にゆだねられているかのように。」――なんという陶酔！ 感覚的なすばらしさになんと圧倒されていることでしょう！ これはそれ以上に，彼の文学において熱狂的な崩壊と，永遠に肉体的なものに熱中しない唯一の例です。十字架にかかった者とディオニュソスがこの魂の中で神秘的に一体化しています。ニーチェの場合と同様に。受難の人，ゲッセマネの男と神の前で踊る際に衣服をからげる異教の祭司とが一体化しているのです[26)]。

26）Thomas Mann: Gerhart Hauptmann, In: Gesammelte Werke, Band IX, S. 811–813. この部分は注 13）の Selbstkommentare にも収録されている。S.169–170.

ゲールハルト・ハウプトマンとペーペルコルン

先に引用したトーマス・マンのハウプトマン論は，キリスト教的な傾向と異教的な傾向をハウプトマンの作品において探求しているが，そこには der Gekreuzigte（Schmerzensmann）と Dionysos が神秘的に一体化していると述べている。トーマス・マンはゲールハルト・ハウプトマン（1862–1946）その人に会って，その特徴を用いてペーペルコルンという作中人物を創造した。作品を読んだ人には，ハウプトマンの特徴が数多く表現されていることがすぐにわかったという[27]。クラウス・ハープレヒトは，そのことでハウプトマンが気分を害したことも含めて，両者の緊張した関係について 10 頁ほど費やしている。

その内容については，よく理解できるのであって，ペーペルコルンのあまりにもイローニッシュな描写に問題があったのである。トーマス・マンもそれを気にしていた。

1952 年 11 月のハウプトマンについての講演の中で，トーマス・マンは，ハウプトマンと最初に出会ったのは 1923 年の秋であって，場所は北イタリアのボーツェン，休暇中に何回か一緒にお酒を飲んだと語っている。それは『魔の山』完成の約 1 年前のことであった。マンは，セテムブリーニとナフタというこの二人の知的なおしゃべりからカストルプを解放してやれるような人物をさがしていた。ハウプトマンと出会って何回かいっしょに飲んでその態度を観察しているうちに，マンの心の中で「この人だ！」（Das ist er !）というささやきの声がしたという[28]。

1912 年度のノーベル文学賞受賞者である先輩作家に対して畏敬の気も

27）Klaus Harpprecht: Thomas Mann, Eine Biographie, 1995 Reinbek bei Hamburg, S. 538–548.（翻訳）クラウス・ハープレヒト著『トーマス・マン物語（I）』岡田浩平訳 2005 東京、三元社 470–478 頁。

28）Thomas Mann, Selbstkommentare, Der Zauberberg, S. 171

Karl Augst Horst:
DAS ABENTEUER DER DEUTSCHEN LITERATUR IM 20. JAKRKUNDERT, 1964
München, S.82

ちをもっていたマンであるが，ペーペルコルン像をつくるにあたって，「あいまいな」（原文で undeutlich という形容詞を使っている）得体のしれないという雰囲気，嘲笑的な要素を入れた。ハウプトマンと共通の外貌を与えながらマラリア熱のために衰退していく姿を加えた。終わりまできちんと終わらない言葉や，酒を飲む手が震えていて体力の衰えを悟らせるところもある。1925 年 1 月 5 日付，ヘルベルト・オイレンベルクに宛てた書簡は，事件を伝えている。

> 私がオランダ人の人物像についてハウプトマンの肖像を使ったという非難に対して私は怒りをもつ抵抗しなければならないでしょう。それは本当ではありません。だが，それは本当でないと言いながら，真実に栄誉を与えておきたいのです。人物像がいよいよでき上がってきたその当時，私はボーツェンで[29]，詩人の堂々として心をゆり動かすような印象に支配されていた。この体験が個々の外的な特徴に関していえばペーペルコルンの形成に影響を与えた，それは否定できないし，またしたくないのです。しかし，それ以上のことは，ハウプトマンとは関係ありません[30]。

ハウプトマンは，トーマス・マンの作品と自作品を出版している S. フィッシャーに宛てた 1924 年 11 月 26 日付の手紙では，『魔の山』は「叙事作品の数少ない傑作の一つである」と讃えていた[31]。しかし，その後第 7 章を読んで非常に気分を損ねたようである。ペーペルコルンの外見やしぐさも不快であるし，滝の前での踊りと，へびの毒を自分で注射して自殺した結末に憤ったにちがいない。

29）Hans Wysling は注をつけ、1924 年の 7 月にもバルト海のヒデンゼーにある修道院で二人が会ったことを記している。

30）Thomas Mann, Selbstkommentare, Der Zauberberg, S. 51

31）ハープレヒト『トーマス・マン物語（I）』岡田浩平訳 474 頁。

その場面の表現をみてみよう。フリューエラ渓谷の滝を見学に行こうというプランがあり，カストルプ，ショーシャ夫人，セテムブリーニ，ナフタ，ヴェーザル（ショーシャ夫人への憧れをおさえきれない人）等みんなで馬車に乗って遠出をしたのであった。実際にはダヴォスにそのような滝はないので，作者はどこか他の滝を想定したのであろう。8 メートルほどの瀑布のごうごうという水音をききながら，「ペーペルコルンはコートの襟をたてて，帽子をそばの地面におき，名前の頭文字を入れた銀の杯に注いだポートワインを何回も飲みほした。」（940）そして滝に向かって何かしゃべっているが，滝の音のためにきこえない。「彼は左手で，人を呪縛して注目させる文化的ジェスチャー（Kukturgebärden）をみせながら，すべての音を呑みこんでしまう水の轟音に向かってしゃべりつづけた[32]。」（941）「みんなは彼が頭を斜めにかしげるさま，唇の裂けた苦痛のようす，受難のキリストをみた」それからさらに，「衣の裾をからげて踊り狂う異教の司祭のような神聖な淫猥さ」を感じとった[33]。まさしく，キリストとディオニュソスである。だが，そのあとの突然の死，それは自殺だった。カストルプは感想を述べる。「彼は非情に大きな人格をもった人でした。生を前にして感情が衰退してしまうことを，宇宙の破滅とも，神の恥辱とも感じておられたのです。彼は自分のことを神の交歓の道具と考えていたのです。あなたはこのことを知らなければなりません。それは王者らしい妄想

32）「文化的ゼスチャー」（Kulturgebärden）はトーマス・マンの造語であり、何を意味するのか、わかりにくい言葉である。新全集の Kommentar で、ノイマンは、トーマス・マンが 1914 年に発表した「戦時の断想」（Gedanken im Kriege）の中で、文化と文明のちがいと説き、「文化は閉鎖性であり、様式、形態、姿勢であり、趣味である」と述べているところが、この独特な用語の解明に役立つかもしれないとしている。Kommentar S.352 ペーペルコルンが紹介された当初からこの語が用いられていた。

33）トーマス・マン全集 III『魔の山』（新潮社版 1972）670 頁、高橋義孝訳の言葉の選び方には、真似のできないうまさがある。注 26）と同じような表現。

でした。」(946)

「自分の作品に薬味を効かそうと，こっそり密殺するような乞食に，私は興味がない。」といってハウプトマンはフィッシャー書店社主宛ての手紙の下書きで書いている[34]。この手紙の内容はトーマス・マンに伝えられたのであろう。トーマス・マンは大いにあわてていたと思われる。1925年4月11日付のハウプトマン宛の手紙がそれを証明している。この手紙は，『魔の山』の Selbstkommentare に全文が載っている。トーマス・マンは丁重に謝罪した。「私はあなたに対して不正をはたらきました。私は危機に陥っておりまして，誘惑にのり，誘惑に屈してしまったのです[35]。」という言葉に偽りはなかったであろう。そしてハウプトマンは寛大な態度で謝罪を認めた，とされている。

ゲールハルト・ハウプトマンは1946年の6月6日，トーマス・マンの71歳の誕生日に84歳で死去した。ハウプトマンの死後しばらくして，1949年トーマス・マンは「ファウスト博士の誕生」と題するエッセイを発表し，ペーペルコルンとハウプトマンとの類似について述べている。ハ

---

34) ハープレヒト『トーマス・マン物語（I)』475頁。岡田浩平訳を借用した。新全集『魔の山』の Kommentar では、Quellenlage と題した章を設けて、主な登場人物それぞれについての解説があるが、Mynheer Peeperkorn の冒頭で、1925年1月4日付のこの Samuel Fischer 宛の手紙の一節を紹介している。Thomas Mann Jahrbuch Band 7（1994）には Dokumente として「トーマス・マン、ゲハルト・ハウプトマン往復書簡」が書簡の下書きも含めて収録されている。そこには „Mit Hauptmann verband mich eine Art von Freundschaft“ と題されて、それが第1部とされ（207–257頁)、Teil II として Dokumentation zur Peeperkorn-Affäre が添えられている（258–281頁)。その中にハウプトマンがラッパロから Samuel Fischer に宛てた手紙が収録されている（266–269頁)。

35) Thomas Mann Jahrbuch Band 7 (1994) S. 207. 上記 Dokumente の冒頭に収録されたハウプトマン宛の手紙であり、発信地はミュンヘンのポッシンガーシュトラーセ1である。

ウプトマンの人格について「私が経験した彼の人格の，眞底から独特で，半ば滑稽だが，半ばいつも人を感動させて，深く人の心をとらえ，愛と畏敬の念とを生じしめる味わい」と語り，さらにつづけて，「この『人格』には何か騙し玩具めいたところがあった。いかにも意味ありげで実は何の意味もないというところがあった」と述べ[36]，その人格の不思議な一面にふれている。この説明は，ペーペルコルンについて der undeutliche Peeperkorn（868）と言われていることと符合する。讃美するとともに，イロニーをこめて見ずにはおれない要素がペーペルコルンにはあるのである。それはトーマス・マンがハウプトマンからうけた印象でもあった。

ハンス･カストルプに対するペーペルコルンの影響

ハンス･カストルプはペーペルコルンからどのような影響を受けたのか。ペーペルコルンは，『魔の山』全体の中でどのような意味をもつのか。この問題に答えることは容易ではない。ハウプトマンへの謝罪を述べたトーマス・マンは，まずセテムブリーニとナフタのおしゃべりからカストルプを救い出す人物をどうしたらよいかを考え，悩んでいた。具体的にその人物像が見えてこなかった時点でボーツェンでハウプトマンに会い，誘惑に負けてハウプトマンのしぐさの多くをペーペルコルンの人物描写にとり入れてしまった。

ハンス・カストルプはペーペルコルンの人格のあいまいさは感じていたが，何といってもその人間的な大きさ，品格（Format）に感動し，大きな影響を受けたことはまちがいないであろう。セテムブリーニから，人物を神秘化することによって偶像崇拝におちいる危険性を指摘されても動揺することがなかった。カストルプは一度もペーペルコルンの悪口を言ってい

36) Thomas Mann: Gesammelte Werke Band XI, 1974 Frankfurt am Main, S. 275 (Die Entstehung des Doktor Fautus XIV)「ファウスト博士誕生」佐藤晃一訳 1954 新潮社 168 頁。

ないのである。

カストルプが最も感銘を受けたのは，ペーペルコルンのディオニュソス的な生への意志であると言ってよいであろう。それはセテムブリーニにもナフタにもない「神秘」（Mysterium）であった。ワインや卵料理などの自然の恵みをよく味わうこと，自然の恩恵に浴して生きること，これは単純なことであったが，ペーペルコルンがハンス・カストルプに与えた最高の贈りものである。ペーペルコルンは，トーマス・マンが「ゲーテとトルストイ」（1921）の中であげている巨人アンタイオス，大地の恵みを受ける神の話を想起させる。彼は自然の恵みを受けた人としてトーマス・マンがとらえたゲーテの後継者といっていいだろう[37]。生命力にみちたこの人物が，主人公に「死への親近感」を忘れさせ，ぐんぐんと生の方向にひっぱっていってくれたのだろうか。平地へ帰り市民生活にもどることを最も大切な市民の義務だと考えたのは従兄弟のヨアヒムであった。ペーペルコルンは，ヨアヒムのような市民的，道徳的な義務ではなく，「健康で素朴な人生の賜物」（854）であり，生の根源的なものをハンス・カストルプにすすめた。その意味で「トゥエンティ・ワン」の節でペーペルコルンが語ったことが主人公に最も大きな影響を与えたのである。

ところがペーペルコルンも病気と死に対する共感をもっているのである。熱帯のマラリア熱をもちこんでおり，発熱をしてお見舞いをうけたとき，キニーネの毒性に対する深い関心についても語った。最後の節では，滝の前で自然のエレメントと一体化して後，蛇の毒を自らに注射して自殺をとげてしまう。ペーペルコルンの自殺は，彼のディオニュソス的な生の肯定と矛盾しないのであろうか。この点をどう考えるかが問題となろう。

第 6 章の「雪」の場面で，「思考に対する支配権を死に譲りわたしては

37）Goethe und Tolstoi（1921）は、『魔の山』との関連においてもっと詳細に論じるべき、すぐれた論功であるが、これについては別の機会に譲りたい。

ならない」と誓ったカストルプは，ペーペルコルンによって生の方向に導かれたと言えるのかどうか，ハープレヒトはこの点をまだはっきりと肯定していない。ハンス・ヴュスリングもこの点については否定的で，ペーペルコルンとの出会いがカストルプを積極的に変えていくところまでいっていないと述べている。彼はペーペルコルンの死のあとにまだ，「大きな無感覚」にとらわれていくからである。

ペーペルコルンの病気や死に対する共感をマイナスに考えなくてもよいと思う。ペーペルコルンの自殺もディオニュソス的な生の肯定と矛盾せず，むしろ神秘的，宗教的に感得された生の義務を果たしたのである。フリューエラの滝の前で，轟音とともに流れおちる水をみながら，原始の自然の偉大な力にふれたペーペルコルンは，左手の「文化的なゼスチャー」でそのようすを讃美したのであったが，それと同時に自らの体内にある病気のことを思い，自然の偉大さに抵抗できないと思った。彼はよく「片がつきました」（erledigt）というくせがあったが，自らの生に片をつけて終わらせてしまったのである。ヘルムート・イェンドライエクは，「ペーペルコルンの死は，ディオニュソス的――陶酔的な極端さの行為であることがわかり，その巨人的――放縦さにおいて人間の限界を粉砕している[38]。」と述べているが，この人物の行為を正確に言い当てている。

ハンス・カストルプは，ペーペルコルンを前にして，„Mein Gott – eine Persönlichkeit!“（「ああ，大人物だ！」）と感じる瞬間があった。（856）生の司祭としての大人物から彼は多くのものを得て，もはやセテムブリーニとナフタの対立に左右されなくなって，第一次世界大戦勃発とともに「ベルクホーフ」を離れるまでの時間を全うすることができたのである。

（2005 年 7 月）

38）Hekmut Jendreiek: Thomas Mann Der demokratischer Roman, 1977 Düsseldorf S.315